

国語文字史の研究十二

国語文字史
研究会 編

和泉書院

『日本靈異記』中巻第一縁「嘯喊」の訓釈について

坂 尻 里 奈

『日本靈異記』（以下、靈異記と示す）中巻第一縁の「護法嘯喊、善神慍嫌」の箇所に対する訓釈として、来迎院本の傍注に

護法嘯喊クチヒツミ 善神慍嫌ニクムサウフ

と、国会図書館本の傍注に

護法嘯マナカヒスヘクチヒツウ喊マナカヒスヘクチヒツウ 善神慍嫌ニクム

とある（来迎院本は日本古典文学影印叢刊1〔日本古典文学会〕の、国会図書館本は古典資料6〔すみや書房〕の複製によった）。この「嘯喊」の訓について検討することにした。

一 諸テキストの比較

この箇所について、諸テキストがどのように訓んでいるかを見てみる。

護法嘯喊くちひつみみ、善神慍嫌にくむふ。（日本古典文学大系）

護法も嘯喊くちひつみみ、善神も慍げんじん嫌にくひたまふといふことを。（新潮日本古典集成）

護法も嘯喊くちひつみみ、善神も慍にく嫌ひたまふ。（新編日本古典文学全集、日本古典文学全集・講談社学術文庫も同様）

護法ごほう嘸ふ噉たんみ、善神ぜんじん慍いん嫌けんふ、(新日本古典文学大系)

護法ごほう嘸ふ噉たんみ、善神ぜんじん慍いん嫌けんひたまふといふことを。(ちくま学芸文庫)

右のうち、日本古典文学大系は来迎院本発見以前のものであり、日本古典文学全集は中巻・下巻の序にしか来迎院本を反映させていないが、来迎院本の傍注「クチヒソミ」と一致する訓を採用しているものがほとんどである。

一方、右と異なるものもある。

護法ごほうは嘸ふ噉たんめ、善神ぜんじんは慍いん嫌けんたまへるなり。(松浦貞俊氏『日本国現報善悪霊異記註釈』)

松浦氏は、その注解で「嘸」は「顔をしかめる」こと、「噉」は「慍」の字で同じく「面をしかめる」の意。「頻ひん」と熟して、「愀くへて楽らくまざる」の意である。今、假に「まゆをひそめ」と訓じた。」と説明される。

二 「クチヒソム」について

まず、来迎院本、国会図書館本のどちらにも見られる「クチヒソム」の訓について、他の用例を見てみる。

「クチヒソム」とは、

噉たん (略) 口參差くさんさ 口由加牟くゆか牟 又口比曾牟くひそ牟 (新撰字鏡・天治本)

とあるように、「にがにがしく思つて口がゆがむ。にがにがしく思う顔つきをする。」(『日本国語大辞典』(第二版、以下同様)) 意をあらわす自動詞である。

「おびおびしき真似したまふ。何するものぞ」と、口ひそむも知らず(うつほ物語・忠こそ)
あやしく、ひがくしくもてなし給ふを、もどき、口ひそみ聞ゆ(源氏物語・総角)

といった用例が見られる。

古辞書類では、

嘸(略) ユガム イカル ハ、カル クチヒソム(略) (類聚名義抄・観智院本)

嘸(略) クチヒソム マナカミスハル ヒソム(同)

嘸(略) クチヒソム(同)

嘸(略) クチヒソム(同)

嘸(略) シジマル セム シハ ニカム マシロク ロヒソム(略) (同)

嘸(略) クチヒソム 噓ハ上同 (色葉字類抄・黒川本)

嘸ハメロクハチヒソムハ 噓ハ上同ハ 此略 (法華經單字)

とあり、「嘸」「噓」などを、それぞれ「クチヒソム」と訓むことがわかる。

また、靈異記の訓釈と同様に、「嘸噓」あわせて「クチヒソム」と訓む例として次のようなものがある。

而間天神ハ噓ハ噓ハ而ハ (将門記・真福寺本)

あるいは、また、噓ハ噓ハして、疑惑を、いたかん、(仮名書き法華經・妙一記念館本)

なお、右の将門記の例について、『将門記研究と資料』(古典遺産の会・新読書社)には、「いわゆる文選訓みであ

る。但し「嘸噓」なる熟語はなく、或は「嘸噓」・「噓噓」(ともに「うれえる」の意)の誤りかもしれない。」とある。

このようなクチヒソムの例を見ると、靈異記の例を国会図書館本では「クチヒソウ」と訓んでいるが、これは、

「ム」を「ウ」と誤ったものではないかと考えられる。

なお、「クチ」の付かない「ヒソム」単独の形では、「泣き顔になる」(『日本国語大辞典』の意味で、中古の和文

資料で用いられている。

親子の面おもても見みでくだしてんずるかとて、たゞひそみにひそみ給ひて(落窪物語)

まみのあたりうちしぐれて、ひそみ居ゐたり(源氏物語・若菜上)

三 「マナカヒスヘ」について

次に、国会図書館本の傍注のみに見られる「マナカヒスヘ」についてであるが、古辞書類には次のような二つの形が見られる。

噺 (略) クチヒソム マナカミスハル ヒソム (類聚名義抄・観智院本)

噺 (略) / クチヒソム / マナカヒスハル (倭玉篇・拾篇目集)

「マナカヒ」については、万葉集に次のような例がある。

……何處^{いづく}より來りしものそ眼交^{まなかわ}に (麻奈迦比爾) もとな懸^かりて安眠^{やすみ}し寢^なさぬ (万葉集八〇二)

また、時代を下ると、

瞶 (略) / マツケ / マナカイ / メノヒケ (倭玉篇・拾篇目集)

+ MANAGAI マナガイ n. Between the eyes; the centre of the forehead. (改正増補和英語林集成)

の例がある。ただし、『日本国語大辞典』で、「目(ま)の交(か)いの意」目と目の間。転じて、目の前。まのあたり。」と説明されているように、万葉集の例は、身体の一部としての目と目の間というより、「目の前にしきりとちらつく」という意味で用いられている。

一方、「マナカミ」については、『日本国語大辞典』では「目頭(めがしら)」。の意とされており、靈異記より下る説話集に、「スヘ」という語と合わせて用いた例が見られる。

目ヲヒシキテ マナカミラスヘテ 香呂ヲ額ニ當タリ (打聞集・静観僧正事)

靈異記の例は、万葉集に見られる「マナカヒ」の例よりむしろ打聞集に近く、「マナカヒ」は「マナカミ」のマ行とバ行とが子音交替した「マナカビ」であるという可能性が考えられよう。⁽¹⁾

いづれにせよ、靈異記の「マナカヒ」は目と目の間、目がしから眉間のあたりを意味すると考えられる。
では、目がしら・眉間を「スフ」とはどういう意味であろうか。訓点資料では、「嘸」はしばしば「嘸眉」という形で用いられている。

国内吏民嘸眉ハシメテ而涕淚テイルス。(将門記・真福寺本)

請コフ爲タメニ嘸眉シハラクヒソメヨ (遊仙窟・醍醐寺本)

獨ヒトリ嘸眉リメマコ而永ニ結ナカク (同)

嘸眉シメル (文鏡秘府論・地巻)

また、色葉字類抄(黒川本)に「嘸ヒソム／笑也／眉」、法華經音訓に「感シツマヒソム 蹙異本」とある。

これらの訓「ヒソム」は、第二節に見た「泣き顔になる」意の自動詞とは異なり、「(眉を)寄せる、しかめる」の意味の他動詞であるが、こうした「嘸」の用例から推測すると、「マナカヒスヘ」とは「眉をひそめる・寄せる」意だと考えられる。先の打聞集についても、「目をひしぎて」つまり目をつぶって、「眉間を寄せる」という動作が想像される。

この「スヘ」について、小泉道氏「三昧院本靈異記の訓釈」⁽²⁾は、「マナカヒスヘ」を「エ↓ヘ」の仮名遣の誤用例として扱われる。⁽³⁾先の打聞集の例も、諸研究では「据あて」ととらえて、中島悦次氏は「宇治拾遺物語 打聞集 全註解」⁽⁴⁾において、「目な上を据あて」か。「目な上」とは「目な尻」に対してこうも云ったのか」と解釈され、また、竹岡正夫氏「打聞集訓釈」⁽⁵⁾は、「嘸」の字を、靈異記に「マナカヒスヘ」と、名義抄に「マナカミスハル」と訓じていることを挙げ、「一心不乱になって形相の変っている有様をいうのであろう。」「目ナ上ヲ据エテ」から来た語であろう。口語の「目をすえて」に近い。」と説明している。東辻保和氏「打聞集の研究と総索引」⁽⁶⁾、木村晟氏編「打聞集本文と漢字索引」⁽⁷⁾も「スヘテ」と補われている。

確かに、ハ行とワ行の混用は中古期以降多く見受けられるところであり、靈異記の訓釈においても、

・エ→「嗥吠カウハイトヘテ」(下巻第二縁、前田家本傍注)

・ハ→ワ「詐イツワリコトシテ」(下巻第四縁、前田家本傍注)

のような混用例が幾つかある。

しかし、「マナカヒスへ」に関しては、本当に「スエ」との混用であろいか。

「スウ・スエル(据)」は「物を動かさないように、一定の場所に置く。」(日本国語大辞典)のが原義であり、そこから派生して、「視線を一点にして動かさないようにする」、つまり一点を凝視する意味で「目を据える」という表現も見られる。

主人とおほしきもの、大おとこのまなこをすへ、つらたましひ誠まことにあらけなかるが(保元物語・金刀毘羅本)

ひよろつきながら目をすえてむづかしいかはつきしたる大なまゑひ(浮世風呂)

しかし、これらは「眉をひそめる」とは意味が異なる。また、類聚名義抄、倭玉篇のどちらも「マナカミ(ピ)スワル」ではなく「スハル」と表記されていることから、すべてが「スエ」との混用例だとは考え難い。

ならば、「スフ(吸)」はどうか。「吸い込む、引き寄せる、引き付ける」という意味で用いられる例がある。

過す磁石於拳鐵山こ以嘘こ鐵こ(嘘須こ与利毛) (靈異記上巻序、興福寺本後注)

しかし、この語はハ行四段活用動詞であり、「スハル」という自動詞をもたないため、あてはまらない。

それでは、「スへ」をどう捉えるべきだろうか。そこで、問題の「嗥喊(嚙蹙)」という語の意味について説明した訓点資料の記述を見ると、以下のようにある。

類蹙ス(といふは)〔者〕、身の不信の相なり。若(し)眉ヲ蹙スブ(と)イフトキ(に)ハ蹙スに作(る)ベシ。今云、類(と)いふは〔者〕数々ゾ。蹙スは亦併ヒゾ〔也〕。眉を一處に併ヒブル(なり)。蹙スの音(は)子六反、迫也。亦、

賊に作レリ。(石山寺藏法華經玄贊平安中期点・中田祝夫氏釈文)

ここから靈異記の「護法噸喊」の訓「マナカヒスへ」は「眉間を」スブの意と考えられる。

「スブ」は、類聚名義抄(観智院本)に、「併スフ」(正宗敦夫氏の索引に「○スブの意か」とある)とあり、また「腴」「搭」「綜」「惣」等にスブの訓がみられる。用例としては、多くのものを一つに集めまとめ統一する意の「(統)」が先にある。

〔應〕輪王と作(り)て四の洲渚を統^スベキヒトナリ。(東大寺図書館藏地蔵十輪經元慶七年点・中田祝文)

方(と)いふは〔者〕、情(と)機(と)を統^スブル〔之〕法軌たり(といふなり)。(石山寺藏法華經玄

並統「衆才」《統須部多流》(靈異記・下巻第三十緑、前田家本後注)

海神、於是、捻^{スヘットへのウラトモを}集海魚^{ニテ} (日本書紀・神代紀下・兼方本)

靈異記の「マナカヒスへ」や打聞集の「マナカミラスヘテ」、法華經玄贊の「眉ヲ蹙^スブ」の例は、これらの「(統)」から派生した「せばめる、ちぢめる」という意味を持つバ行下二段活用動詞「スブ(窄)」と考えるのではないだろうか。⁽⁸⁾

膝ヲ立、肩ヲスベ、羽ヅグロイスルヤウニシテ(沙石集・巻八・姫君事(梵舜本))

Sube, uru, eta, sbe, bur, beta (窄べ、ぶる、べた) 狭くする、または、閉じ塞ぐ。例、Michio subbe (窄ぶる) 道路を遮断する。『Fionl cuchia suburu, l. subete mōsu. (人に口を窄ぶる、または、窄べり下って人に懇願する。』Vouo suburu. (尾を窄ぶる) 恐れなどのために、尻尾を両脚の間にさし入れ Catano suburu. (肩を窄ぶる) へり下り卑下して、両肩を締めすくめる。(邦訳日葡辞書)

のような例もあり、

虎、にはかに尾をすべて、逃げ退きければ（御伽草子・二十四孝・楊香）

は、「尾をすばめて両肢の間に入れることをいう。」（日本古典文学全集、頭注）とされる。

ただ、「スプ」の語形は、副詞スベテ

すべて千うた、はたまき、なづけて古今和歌集といふ（古今集・仮名序）

彼は欣一趣（し）て修するい、都て通葉は無シ。（石山寺藏法華經玄賛平安中期点・中田祝夫氏釈文）

のように「スプ（統）」の方がよく用いられるようになり、「せばめる、ちぢめる」の意を表すには、同形ではわかりにくいため、次第にスボム

淪（略）スボム（略）（類聚名義抄・観智院本）

後ニ舍利弗口ヲスボメテ息ヲ出シ給フニ（太平記・卷二十四・依山門噉訴公卿僉議事）

が用いられるようになっていったものであろう。

また、これに対して「せばまる、ちぢまる」の意を表す「スバル」の用例として、次のような例がある。

蹙（略）／シシマル／スバル／アツマル（略）（字鏡・世尊寺本）

窄スバル／（略）／スホシ（色葉字類抄・黒川本）

耳はすばりにしを（うつほ物語・国譲中）

うつほ物語の例については、「すばる」は「窄はさまる」で、狭くなる、萎縮する、の意。ここは、老人になって耳がよく聞こえないことをいう。」（新編日本古典文学全集、頭注）とされる。この例からすると、類聚名義抄（観智院本）「マナカミスバル」に見られる「ミ」、「ミミスバル」の例かとも考えられる。

以上のことから見て、靈異記の「嘖喊」についての国会図書館本の傍注は「マナカヒスベ クチヒソウ^(ム)」と訓むのが正確ではないかと考えられ、また、これにより、打聞集の「マナカミラスヘテ」も「スエテ」ではなく「スベテ」と訓むのがよいと考えられる。

これまでの靈異記の諸テキストにおいて、国会図書館本の訓釈は、専ら後注のみが取り上げられて、傍注はほとんど取り上げられて来なかったが、今一度省みる必要があるのではないだろうか。他本の訓を補う語彙資料としても重要ではないかと思われる。

注

- (1) m・bの交替については例が多く、山口佳紀氏『古代日本語文法の成立の研究』(昭60 有精堂出版)のなかに、「ソノカミ・ソノカビ(当時)」「トミ・トビ(富)」などの例が挙げられている。
- (2) 『国語国文』35—5(昭41・5)
- (3) 『日本靈異記諸本訓釈索引』(訓点語と訓点資料)37 昭43・2)も同様である。
- (4) 昭45 有精堂出版
- (5) 『香川大学文学部研究報告』第1部18号(昭39・10)
- (6) 昭56 清文堂出版
- (7) 平10 大空社
- (8) 「スプ(統)」と「スプ(窄)」をとともにとらえることについては、アクセントをも考慮に入れた蜂矢真郷氏「対義語ヒロシ・セバシとその周辺」(『万葉』104 昭55・8)参照。